福島県浜通り地域住民の生活史における複合災害の集合的外傷と回復
（発表要旨）

2023 年 11 月 13 日
高原耕平（人と防災未来センター）
小磯匡大（ふたば未来学園）

1. 現状把握

（ア）天童荒太『迷子のままで』（2020）

（イ）精神的再形成（リフトン 1967[2009]）の不全

（ウ）「外」から福島を研究対象にするわたし

① 「これが問題なのです」という指摘自体が問題を固定化している？

② より大きくは、東京-福島の構造

2. 着眼点：集合的外傷 Collective Trauma

（ア）心的外傷 Psychological Trauma：言語化が困難な恐怖体験、自己の物語への統合 integration の困難、共同世界への信頼の喪失

J. ハーマン（2023）、中井久夫集など

（イ）K. Erikson（1976[2021]）：集合的外傷の概念を提出

① バッファロークリーク洪水災害（1972）：炭鉱町の親密な共同体を襲ったダム決壊事故（高原 2022）

② 個別的外傷 Individual Trauma, IT と集合的外傷 CT を区別

- IT の集合体が CT なのではない。IT と CT は相互強化する。
- 日本では 1995 年以降、PTSD の医療化が先行→IT モデルが基本

③ <u>回復の基盤となる「つながり」の喪失</u>、<u>企業城下町ゆえのコミュニティの緊密政と脆弱性</u>

（ウ）浜通りにおける「迷子」感、精神的再形成の不全を CT として捉える

（エ）先行研究

① 成・牛島（2023）：長期避難者の CT に着目

② 牛島（2005）：水俣病が地域にもたらした「痛み」を CT として解釈

（オ）バッファロークリークと浜通りの比較

	バッファロークリーク	浜通り
地域社会	炭鉱企業を頂点とする きわめて緊密な隣人関係	東京電力を中心とする おおむね濃密な隣人関係、地縁共同体
住民	ほぼ全員が炭鉱関係者	東電関係者＞間接的受益者＞周縁的関係者＞非利害関係者
災害様相	突然の濁流、一撃的	突然の津波、一撃的 ＋見えない放射能汚染、長期避難
被災体験	高い均質性、類型的な訴え	避難（期間、場所）、各種区域の線引、賠償、東電との関係、帰還時期・可否等により多様化

3. 方法：生活史調査

（ア）「個人の生い立ちと人生の語り」「「何があったのか」「何を選びとってきたのか」の連鎖を聞くことになる」（岸 2022）

① 「そのひとにとっての出来事（災害など）の意味」に接近する

（イ）人生の転変をふりかえり、意味づける現場に立ち会う。語りのさなかで論理が徐々に形成されてゆく。

① 「それゆえ、なぜなら」ではなく、「ほんで…、ほんで…」の語り（高原 2021）

② いまだ渦中にいる浜通りの住民に対して可能なのか？

4. 対象者

A 氏	40 代男性	双葉町	公的機関	震災以前の豊かな地縁の想起、上の世代から町の文化を「引き継げなかった」という思い
B 氏	80 代女性	飯舘村	自営業	共有林のくじ引きから始まる 1 年、夫が出稼ぎに行くと妻は楽、自身の才覚による経営拡大、故郷での暮らしの瓦解と闘病の重層化
C 氏	60 代男性	富岡町	農業法人	原発建設による町の変化を目の当たりに、農家でも東電社員と同じ暮らしができることを見せたい、自身の才覚による経営拡大
D 氏	40 代男性	楢葉町	漁協職員	鮭の放流が長期間停止、東電への批判は弱め、鮭の遡上・自然産卵を目撃
E 氏	60 代女性	大熊町	元自営業	原発建設による町の変化を目の当たりに、震災以前は「共存共栄」、大野駅前開発の住民意思決定に参画しきれない

5. 分析:長期複合災害の CT の状況

（ア）東電・原発も地域社会の「縁」の一部だった

① 人工的な地縁拡大（A さん)、急発展のいびつさ（E さん）

② 東電・原発を織り入れたがゆえに、CT が拡大する脆弱性を内包？

③ 帰還する/しない、新住民と旧住民という「縁」形成の困難

（イ）主導権の感覚

① 「自分で決めている気がしない」(E さん)、「好きなことができている」(C さん）

② 落ち着いたという感覚がない（A さん）

③ 東京-福島構造（「植民地」的構造）の元では共同体や個々人の固有の主導権が重視されなかった　→公共・言説空間を創出することの難しさ

（ウ）「世代」の価値

① 復興における自己規定としての「世代」(A さん)、廃業届け（E さん)、息子や若者世代の就業・起業への手応え（C さん）

6. 考察:長期複合災害の CT の回復の萌芽？

（ア）「軸」を探し始めてはいる（A さん、C さん）

① 現状の東京-福島関係に納得はしていない

② 地域住民の帰還・生活再建・コミュニティ再建のテンポ・意識と、東京から「降ってくる」復興事業のズレ

（イ）原発・東電・東京との距離感と物語の再構築

① 「原発で出稼ぎが無くなった」ストーリーの相対化（B・C・E さん）

② 「東京になれると思ってしまった」(C さん）→その次のストーリーが未定

③ 「次のストーリー」をまた国・東京が提示してくれている（水素、ゼロカーボン、F-REI）

参考文献

天童荒太『迷子のままで』新潮社、2020。

R. J. リフトン『ヒロシマを生き抜く』岩波現代文庫、2009。

J. ハーマン『心的外傷と回復　増補新版』みすず書房、2023。

K. エリクソン『そこにすべてがあった』夕書房、2021。

高原耕平「集合的トラウマと災害伝承 鉱山ダム決壊から半世紀後のバッファロー・クリーク」『震災学』17、2023。

成元哲・牛島佳代編著『原発分断と修復的アプローチ』東信堂、2023。
牛島佳代「汚染地域住民の「痛み」」『保健医療社会学論集』16(2)、2005。
岸政彦編著『生活史論集』ナカニシヤ出版、2022。
高原耕平「だから」と「それから」 K 復興住宅のミノルさんのこと」『受容と回復のアート』生活書院、2021。